

北宋版一切経開寶蔵の欠筆とその伝播・受容について

佐々木 勇

(受理日二〇一三年十月三日)

〇、本稿の目的

宋版に宋皇帝諱・嫌名字の終画を欠く例が存することは、広く知られている。この欠筆は、仏典に比して、漢籍に盛んであり、刻工名と合わせて刊行時推定等に活用されてきた。

一方、仏典でも、宋版・高麗版・金版の版本一切経に、少数ながら、宋皇帝に關わる欠筆が存することが指摘されている。

最初の宋版一切経「開寶蔵」(九七二年―九七七年雕版)における欠筆例の早い指摘に、京都南禅寺蔵「仏本行集経」卷第十九の「竟慙」、中村不折旧蔵書道博物館蔵「十誦律」卷第四十六の「敬竟」、山口常順旧蔵「蘇悉地供養法」の「殷」、山西省高平県文博館蔵「妙法蓮華経」卷第七の「敬」が有る。

ただし、残存開寶蔵の全文が不明であったため、該当字がどの程度欠筆とされているのかは判然としなかった。ところが、二〇一〇年十一月、「開寶蔵」残本全十二巻の複製本『開寶遺珍』(文物出版社)が出版され、この複製本に依る欠筆の調査結果がさつき公表された。この報告は、開寶蔵「大方等大集経」卷第四十三に「境」の欠筆が存する、とする。しかし、実際には存在しない。また、欠筆の可能性が有る漢字が当該巻に出現するの否が、何例中何例が欠筆例であるのかわからない。

そこで、本稿は、まずこの『開寶遺珍』全十二巻の欠筆例を記述する。そして、この開寶蔵の欠筆が、周辺諸国にいか伝播・受容されたのかを調査する。すなわち、次の二点を調査し、その実態を報告することを目的とする。

- 一、北宋開寶蔵における欠筆の実態を明らかにする。
- 二、開寶蔵に表われた中国の文化事象「欠筆」が、高麗・金および日本に伝承されたものか否かを、高麗版・金版一切経および日本古写本によつて調査する。

一、開寶蔵の欠筆

1. 現存開寶蔵の本文

まず、『開寶遺珍』で公開された開寶蔵のテキストを整理しておく必要がある。『開寶遺珍』附載解説の「説明」(以下、「説明」と記す)を参照しつつ、現存全十二巻の開寶蔵本と、その大正新脩大藏経相当箇所を記すと、左の通りである。

- ①「大般若波羅蜜多經」卷第二百六 山西省博物館収蔵 開寶五年(九七二) 雕造

全二十五張中、第十張半ばから二十五張までを残す。紙右端に「大般若經第二百六 第十一張 秋字号」などと経名・卷号・紙数・千字文号を刻す(以下②③④⑥⑦⑩⑪も同形式である。⑤は千字文号が存せず、⑧⑨は紙端の刻記が見られない。⑫は別形式である。本巻の千字文号は「秋」。「開寶五年壬申歲奉勅雕造」の卷末刊記が刻され、元符三年(一一〇〇)の經戳記が印されている。大正新脩大藏経では、第六卷二八頁下段二行目(以下、SAT大正新脩大藏経テキストデータベースの所在表示に従い06002802とする)末「智清淨」から06002803の尾題「大般若波羅蜜多經卷第二百六」に及ぶ。

- ②「大般若波羅蜜多經」卷第五百八十一 中国仏教協会図文館収蔵 開寶五年 雕造

全二十四張中、第七張途中から二十四張までを残す。千字文「李」。卷末刊記「開寶五年壬申歲奉勅雕造」。大正新脩大藏経では、07100412末「廣大

世尊」から07.100823の尾題「大般若波羅蜜多經卷第五百八十一」に及ぶ。

③『大宝積經』卷第一百十一 中国国家図書館収蔵

全三十三張中、第八張途中から三十三張までを残す。千字文「文」。卷末刊記は、一行目末「歳奉」のみ残る。大正新脩大藏經では、11.0625b04末「勸」から11.0631c11尾題「大寶積經卷第一百十一」に及ぶ。

④『大方等大集經』卷第四十二 上海圖書館収蔵

内題「訳者品名」大方等大集經卷第四十三「隋天竺三藏那連提耶舍譯」日藏分送使品第九」から尾題「大集經卷第四十三」までの全二十九張が完存する。千字文「有」。ただし、卷末刊記は残らず、大観二年（一一〇八）の經載記を印した末紙が付されている。大正新脩大藏經では、13.0282c03から13.0289a16に当たる。

⑤『妙法蓮華經』卷第七 山西省高平県文博物館収蔵 開寶四年（九七二）雕造

鳩摩羅什譯「妙法蓮華經」（大正藏No.0282）の七卷本である。柱刻に千字文号が無い。卷末刊記「大宋開寶四年辛未歳奉／勸雕造」熙寧辛亥年（一〇七一）の「賜經板載記」と、右「大方等大集經」と同一の大観二年經載記印が押されている。

第七卷の全二十九張中、第二十張途中から二十九張までを残す。大正新脩大藏經では、09.0060a26末「值故。」から09.0063b01卷末「妙法蓮華經卷第七」に及ぶ。

⑥『阿惟越致遮經』卷上 中国国家図書館収蔵 開寶六年（九七三）雕造

全三十五張中、第一張末二行から三十五張までを残す。千字文「草」。卷末刊記「大宋開寶六年癸酉歳奉／勸雕造」と、右と同じ熙寧辛亥年賜經板載記大観二年經載記が押される。大正新脩大藏經では、09.0198c03「此。」から09.0207c05尾題「佛說阿惟越致遮經卷上」に当たる。

⑦『大雲經請雨品』卷第六十四 山西省高平県文博物館収蔵 開寶六年雕造

「説明」によると、全三十一張が残存する。しかし、第一張から第四張は「殘碎成片」のため、第五張から三十一張までが複製されている。千字文「大」。卷末刊記「大宋開寶六年癸酉歳奉／勸雕造」。大正新脩大藏經では、19.0507b27末「一切諸佛」から19.0513c06尾題「大雲經請雨品第六十四」に当たる。

⑧『雜阿含經・聖法印經綴卷』 中国国家図書館収蔵 開寶七年（九七四）雕造

「説明」は、第一紙（四行）・第二紙（二十三行）・第三紙（十三行）は『雜阿含經』卷第三十、第四紙（十行）・第五第六紙（十六行）は『雜阿含經』卷第四十、第七紙（十行）は『雜阿含經』卷第三十五、第八紙（十三行）は『雜阿含經』卷第四十四、第九第十紙（二十五行）は『聖法印經』卷尾である、と、千字文「盛」。卷末刊記「大宋開寶七年甲戌歳奉／勸雕造」を刻す。大

正新脩大藏經では、次の箇所にあたる。

第一紙（四行）『雜阿含經』卷第三十 02.0213a03雜阿含經卷第三十—02.0213a06相應、第二紙（二十三行）『雜阿含經』卷第三十 02.0214a16中貧活—02.0214b07舍衛國祇樹給、第三紙（十五行）『雜阿含經』卷第三十 02.0214b10令人住—02.0214b24我今何、第四紙（十行）『雜阿含經』卷第四十 02.0290b21謂天帝—02.0290c03歡喜、第五紙（七行）『雜阿含經』卷第四十 02.0291a08何因何緣—02.0291a17彼天帝釋、第六紙（八行）『雜阿含經』卷第四十 02.0291a21本爲人時—02.0291a28告諸比丘、第七紙（十行）『雜阿含經』卷第三十五 02.0250a27學衣鉢—02.0250b07出家遙見、第八紙（十三行）『雜阿含經』卷第四十四 02.0319a21門聚落—02.0319b04是則名智者、第九紙・第十紙（二十二行）『聖法印經』卷尾 02.0500a24憍慢—02.0500b13大乘常光。

⑨『雜阿含經綴卷』 中国国家図書館収蔵

この巻も、「綴卷」である。全五紙を残すのみである。千字文「川」。卷末刊記は、見られない。大正新脩大藏經を検索すると、本『雜阿含經』は、次の箇所にあたる。

第一紙（二十三行）『雜阿含經』卷第三十九 02.0283a18雜阿含經卷第三十九—02.0283b08即思、第二紙（二十三行）『雜阿含經』卷第三十 02.0214b23人者—02.0214c20敬信人、第三紙（十三行）『雜阿含經』卷第二十一 02.0146c12想於—02.0146c24比丘比丘尼、第四紙（十八行）『雜阿含經』卷第四十四 02.0318b22若失若復得—02.0318c17爾時世尊說偈答言、第五紙（十三行）『雜阿含經』卷第四十四 02.0318a29不久亦當—02.0318b11究竟苦邊。

⑩『佛本行集經』卷第十九 日本京都南禅寺収蔵 開寶七年雕造

大正新脩大藏經03.0739b15の内題「佛本行集經卷第十九」から、03.0744a23の尾題まで全二十二張が残存する。千字文「令」を刻し、巻頭千字文の上に千字文次号「榮」を墨書する。この千字文号の訂正は、南禅寺蔵高麗蔵初雕版においても見られるものであり、日本においてなされたものであろう。尾題の後、一行空けて、卷末刊記「大宋開寶七年甲戌歳奉／勸雕造」を刻し、熙寧辛亥年（一一〇七）の「賜經板載記」が押されている。

⑪『十誦律』卷第四十六 日本書道博物館収蔵 開寶七年雕造

全四十六張が残存する。千字文「存」。尾題の後、一行空けて、卷末刊記「大宋開寶七年甲戌歳奉／勸雕造」を刻し、⑤『妙法蓮華經』⑥『阿惟越致遮經』と同じ、熙寧辛亥年（一一〇七）の「賜經板載記」が押されている。大正新脩大藏經本文では、23.0330a03—23.0340a08に該当する。

⑫『御制秘蔵註』卷第十三 美国哈佛大学賽克勒博物館収蔵 大観二年（一一〇八）刊

現存開寶藏本中唯一、画を刻した版を交える一巻である。「文字十五版、図

画四版、合計十九版」で一巻とする。千字文は不明である。柱刻記は「秘第十三」の下に「四」などと紙数を刻し、右の経巻と異なり、その下には刻工名が彫られている。第十四紙の刻工名「楊蘊」は、複製本でも判読できる。巻末刊記は存しないが、④⑤⑥⑪と同一の大観二年印經戳記が押されている。大正新脩大藏經に、当該巻は未収録である。しかし、幸い、高麗蔵初雕版・再雕版・金版とも現存している。

2. 現存開寶蔵の欠筆

左に、残巻全十二巻各巻の欠筆例を示す。開寶蔵における欠筆例が指摘されていた「敬竟愍」、および、高麗蔵・金蔵に欠筆が見られ、開寶蔵でも欠筆されている可能性が有る「鏡鏡弘」の計六字については、欠筆例の有無と当該巻における出現例数を記す。

- ① 『大般若波羅蜜多經』卷第二〇六「敬鏡鏡弘愍」は、経本文に無い。欠筆字―竟(1/1)。「全1例を欠筆とする」の意。以下同。
- ② 『大般若波羅蜜多經』卷第五八一「敬竟鏡鏡弘愍」は、経本文に無い。欠筆字―(ナシ)。
- ③ 『大宝積經』卷第一二一「鏡鏡弘愍」は、経本文に無い。欠筆字―竟(6/21)。不欠筆字―敬(0/6)。
- ④ 『大方等大集經』卷第四十三「鏡鏡愍」は、経本文に無い。欠筆字―敬(5/5)、竟(2/2)、弘(1/1)。
- ⑤ 『妙法蓮華經』卷第七「竟鏡鏡弘愍」は、経本文に無い。欠筆字―敬(2/2)。
- ⑥ 『阿惟越致遮經』卷上「鏡鏡」は、経本文に無い。欠筆字―弘(5/5)、愍(1/1)、竟(3/7)。不欠筆字―敬(0/7)。
- ⑦ 『大雲經請雨品』卷第六十四「敬鏡鏡弘愍」は、経本文に無い。欠筆字―敬(3/12)。
- ⑧ 『雜阿含經』卷第三十・聖法印經綴卷「鏡鏡弘愍」は、経本文に無い。欠筆字―(ナシ)。不欠筆字―敬(0/2)、竟(0/2)。
- ⑨ 『雜阿含經』卷第三十九・三十二・四十四 合綴卷「鏡弘愍」は、経本文に無い。欠筆字―敬(1/21)。不欠筆字―竟(0/1)、鏡(0/1)。
- ⑩ 『仏本行集經』卷第十九「敬鏡鏡弘」は、経本文に無い。欠筆字―愍(1/3)、竟(1/1)。
- ⑪ 『十誦律』卷第四十六「鏡鏡弘愍」は、経本文に無い。欠筆字―敬(1/1)、竟(52/52)。
- ⑫ 『御制秘蔵詮』第十三「敬鏡鏡弘愍」は、経本文に無い。

欠筆字―(ナシ)。不欠筆字―竟(0/1)。

以上、右現存十二巻から知られる開寶蔵の欠筆字は「敬竟弘愍」四字(八十五例)に限られ、指摘されていた開寶蔵断片によって「殷」を加えられるのみである。

ここで、宋代初期の皇帝とその諱・嫌名の概要を記す。

皇帝とその親族	諱・嫌名
聖祖(始祖)・玄朗	玄絃・玄眩・眩畜・縣懸朗
太祖の祖父・趙敬	敬・驚・警・儆・境・鏡・競・鏡
太祖の父・趙弘殷	弘・殷・愍
初代太祖・趙匡胤(在位九二七―九七六年)	匡・胤
二代太宗・趙匡義(在位九七六―九九七年)	吳・愷・愷・義・議
三代真宗・趙恒(在位九九七―一〇二二年)	恒

右全十二巻の雕版開寶五年(九七二)〜太平興國二年(九七七)は、北宋初代太祖・趙匡胤および二代太宗・趙匡義の治世である。そのため、太祖の祖父「趙敬」・父「趙弘殷」の諱・嫌名「敬竟弘愍(殷)」が欠筆にされたと考えられる。なお、開寶蔵は、「敬竟弘愍」を常に欠筆にするのではないこと、欠筆の割合が巻によって異なること、も確認された。

二、高麗版の欠筆

1. 高麗初雕版の欠筆

初雕高麗版は、全五二四巻、玄宗二年(一一〇一)〜宣宗四年(一一〇八七)に開寶蔵を覆刻したものである、とされる。開寶蔵同様、一紙二十三行・十四字を原則とする。この高麗初雕版は、開寶蔵と同じく欠筆を厳守する、と考えられてきた。

しかし、閲覧困難なため、詳しい実態は不明であった。現在では、高麗初雕版の鮮明な画像がインターネット上に公開されている (<http://kbsutra.ekr.nl/ike/sutra/sutraMain.do>)。以下、この画像によって、高麗初雕版の欠筆を確認する。

右で開寶蔵に欠筆例が存した巻に対応する高麗初雕版が現存するのは、⑨『雜阿含經綴卷』のみである。

⑨開寶蔵「雜阿含經」合綴卷第二紙(「雜阿含經」卷第三十の二十三行)は、初雕高麗版では、「雜阿含經」卷第三十第八紙に当たる。この一紙に「敬」が二十例有る。しかし、初雕高麗版は一例も欠筆としない。他の欠筆例も無い。ただし、開寶蔵でも、この範囲では最初の「敬」を欠筆とするのみであった。また、初雕高麗版で「雜阿含經」卷第二十二紙前半に当たる、開寶蔵第三

紙(十三行)『雜阿含經』卷第二十一には開寶藏で欠筆にされる字が使用されておらず、他字の欠筆例も無い。

右のような実態であり、現存対応箇所のみでは、初雕高麗版が開寶藏の欠筆を引き継ぐとも、欠筆字を訂することが多いとも言切れない。

そこで、現存高麗初雕版『雜阿含經』の全体を見る。

初雕版『雜阿含經』は、卷第十一～三十が残る。それらの巻ごとに、左に欠筆例を示す。ここでも、「敬竟鏡競弘股慳」については、その巻に当該字が何例用いられているかを()内に記す。

卷第十一 欠筆例無し。(出現例数敬(0/10)、竟(0/4)、競(0/2)。鏡弘股慳は無し。)

卷第十二 欠筆例無し。(出現例数・敬(0/1)、竟(0/21)、競(0/2)。鏡弘股慳は無し。)

卷第十三 竟―第5紙第3行(出現例数・竟(1/1)、敬(0/2)。鏡弘股慳は無し。)

卷第十四 慳―第21紙第6行(出現例数・慳(1/1)、敬(0/16)、竟(0/1)。鏡競弘股は無し。)

卷第十五 欠筆例無し。(出現例数・竟(0/6)、競(0/3)。敬鏡弘股慳は無し。)

卷第十六 慳―第27紙第6行・第29紙第1行(出現例数・慳(2/2)、敬鏡竟競弘股は無し。)

卷第十七 竟―第12紙第22行・第33紙第22行(出現例数・竟(2/7)、敬(0/2)。鏡弘股慳は無し。)

卷第十八 敬―第21紙第4行・竟―第22紙第18行・慳―第30紙第22行(出現例数・敬(1/6)、竟(1/1)、慳(2/3)。鏡競弘股は無し。)

卷第十九 欠筆例無し。(出現例数・敬(0/4)。鏡競弘股慳は無し。)

卷第二十 敬―第9紙第23行・竟―第23紙第13行(出現例数・敬(1/8)、竟(1/34)。鏡競弘股慳は無し。)

卷第二一 弘―第15紙第4行・同7行(出現例数・弘(2/2)、竟(0/4)。敬鏡競慳股は無し。)

卷第二二 敬―第20紙第12行(出現例数・敬(1/4)、竟(0/1)、競(0/2)。鏡弘股慳は無し。)

卷第二三 竟―第25紙第14行(出現例数・竟(1/4)、敬(0/17)、競(0/2)。鏡弘股慳は無し。)

卷第二四 敬―第13紙第20行(出現例数・敬(1/1)、竟(0/4)。鏡競弘股慳は無し。)

卷第二五 竟―第13紙第4行(出現例数・竟(1/2)、敬(0/2)、競(0/2)。)

／1。鏡弘股慳は無し。)

卷第二六 竟―第2紙第3行・第4紙第2行・第10紙第1行(出現例数・竟(3/4)、慳(0/2)。鏡競敬弘股は無し。)

卷第二七 竟―第22紙第6行(出現例数・竟(1/1)、敬(0/1)。鏡競弘股慳は無し。)

卷第二八 竟―第20紙第21行(出現例数・竟(1/2)、競(0/1)。敬鏡弘股慳は無し。)

卷第二九 竟―第25紙第6行(出現例数・竟(1/6)。敬鏡競弘股慳は無し。)

卷第三十 竟―第12張第17行・第21張第1行・第24張第15行・鏡―第21張第15行・同16行(出現例数・竟(3/17)、鏡(2/7)、敬(0/31)。鏡弘股慳は無し。)

以上、高麗初雕版『雜阿含經』卷第十一～三十の二十巻において欠筆にされることのある字は、「敬竟鏡弘股」である。この結果は、開寶藏とほぼ等しい。よって、どの程度かは不明であるものの、高麗初雕版が開寶藏の欠筆を反映していることは確かである。

開寶藏との相違点は、高麗初雕版に「股」が無く、「鏡」が有ることである。この相違点は、『雜阿含經』二十巻中に「股」が出現せず、開寶藏現存十二巻本文中に「鏡」が存しないために生じたものである。

2. 高麗再雕版の欠筆

再雕高麗版は、全五五八巻が、高宗二十三年(一一三六)～同三十八年(一二二一)に刊行された。

高麗再雕版の欠筆については、大屋徳城「高麗統蔵雕造攷補遺」(『大屋徳城著作選集9』(一九八八年、国書刊行会)所収)の指摘が早い。大屋は、「固より浩瀚にして周覧すること能はざれば、一概に論ずることを得ざれど」としながら、「欠筆ある経論章疏もあり、無きものもありて一準ならざるが如し。多くは宋諱に欠筆ありて、高麗朝の王諱に欠筆なきものに似たり。」とする。「宋諱闕筆は敬、竟、弘、股に限るもの、如く、①に、蜀版に則るもの」である、とした。そして、開寶藏と直接比較できる、①「十誦律」巻第四十六で「敬」欠筆一例が存するもの「竟」は欠筆しておらず、②「仏本行集經」巻第十九には開寶藏での欠筆例が無いことを明記しておらず、③「西域求法高僧伝」「大慈恩寺三蔵法師伝」「南海寄歸傳」に「弘・股」を指摘した。また、『大唐西域記』における「敬竟鏡弘股慳」のすべてを挙げ、欠筆・不欠筆の別を記している。その、欠筆不徹底の実態をもって、「これ蜀版を移刻するに際し、写生若くは刻工の無関心を示すものに非ずして何ぞや。」と述べた。

まず、大屋に倣い、開寶藏残巻と直接比較可能な十二巻の高麗再雕版における欠筆例を見る。大屋が比較した二巻の結果は、現在の複製本・インターネット公開画像で確認された。

他の十巻で、欠筆例が見られたのは、④『大方等大集経』巻第四十三の「弘」(1/1)・⑥『阿惟越致遮経』巻上の「弘」(4/5)のみであった。すなわち、高麗再雕版は、開寶藏残巻十二巻に見られた欠筆「敬竟弘愍」四字(八十五例)のうち、「敬弘」二字(六例)を残すばかりである。

次に、高麗再雕版でも、『雜阿含経』巻第十一～三十の二十巻における欠筆例を調査した。欠筆例は、次の箇所に過ぎない。

巻第十四 愍―第21紙第6行 卷第十六 愍―第27紙第6行

巻第二一 弘―第15紙第4行・同7行

右のごとく、高麗初雕版とほぼ同一の本文全二十巻中に、欠筆例は、愍(二例)・弘(二例)のみである。しかも、高麗再雕版における欠筆例は、高麗初雕版が欠筆としていた例に限られ、その四分の程度でしかない。この事実から、高麗再雕版における欠筆は、初雕版に比してはるかに低率であったと考えられる。

三、金版の欠筆

金版(趙城藏)は、一一四七年―一一七三年に、やはり開寶藏を元に雕印された。一紙二十三行・一行十四字を原則とする²⁰⁾ことも、開寶藏に等しい。

開寶藏に欠筆例を指摘できた経巻のうち、『中華大藏経』(一九八三年、中華書局)および『趙城金藏』(二〇〇八年、北京図書館出版社)で金藏本文を確認できるのは、以下の七巻である。

その中、①『大般若波羅蜜多経』巻第二〇六・③『大宝積経』巻第一百一十一・⑤『妙法蓮華経』巻第七・⑦『大雲経請雨品』巻第六十四・⑨『雜阿含経』巻第39・30・21・44合綴巻には、欠筆は存しない。

欠筆例は、⑩『仏本行集経』巻第十九に、開寶藏で欠筆であった「愍」(第18紙第16行)を、金版(廣勝寺藏本)でも欠筆にした一例を指摘できるのみである。金藏は、底本開寶藏に存した宋皇帝諱欠筆を、大部分、元の漢字に戻しているらしい。

この点を確かめるため、金藏でも、『雜阿含経』巻第十一～三十における欠筆例を調査した。(ただし、金藏『雜阿含経』は、巻第十三・二十五・二十九が現存しない。)

その結果、『雜阿含経』巻第十一～三十の残巻十七巻中に、つぎの欠筆例が認められた。

巻第十四 愍―第21紙第6行 卷第十六 愍―第27紙第6行
巻第二一 弘―第15紙第4行・同7行

右のとおり、高麗初雕版と比較して、欠筆例は極めて少ない。高麗再雕版とおなじく、版下作成時または彫刻時に、欠筆が修正されたものと考えられる。

四、日本古写本の欠筆

日本において、開寶藏を覆刻した遺品あるいはその記録は知られていない。しかし、開寶藏の刊記を奥書に書写した写経が伝存する。それらの写経本文は開寶藏本文を覆刻した高麗藏・金藏と一致するため、奥書の通り、開寶藏を底本として書写した本であることが知られる。

以下、これらの日本古写本における欠筆の実態を見る。調査できたのは、以下の諸本である。

○石山寺藏一切経内

『出三藏記集』巻第四(一切経第七十五函24号)、『大乘金剛髻髻菩薩経』(一切経第二十函32号)、『孔雀王呪経』(一切経第二十八函24号)

○七寺藏一切経内

『出三藏記集』序巻第十一・同序巻第十二、『集諸經礼懺儀』卷上安元三年(一一七七)写本、『統集古今仏道論衡』、『阿難陀目佉尼呵離陀経』

○高野山金剛峯寺藏中尊寺一切経内

『出三藏記集』巻第二・第四本・第五・第十、『法句経』巻下、『比丘尼傳』巻第四、『大方広仏華嚴経續入法界品』

○興聖寺藏一切経内

『出三藏記集』巻第三・同巻第五・同巻第九・同巻第十・同巻第十一
『出三藏記集』巻第十二、『大方広仏華嚴経続入法界品』、『開元釈教録』巻第十二

○龍谷大学図書館藏

『出三藏記集』巻第五
『西方寺藏一切経内』

○西方寺藏一切経内

『大乘五蘊論』

底本とした開寶藏の行取りに従って書写するのが容易であり、誤りも少ないと考えられるにも拘わらず、右の諸経は、日本における一切経内の他本同様、原則として一行十七字に変更して書写されているものが多い。この点、高麗版・金版とは異なる。

まず、これら諸本の底本開寶藏に欠筆が存したことを確認したい。しかし、

残念ながら、右の諸本に相当する開寶藏本は、伝存しない。

そこで、開寶藏の欠筆を高率で反映していることが知られた、初雕高麗版における欠筆の実態を見る。

右の写経と同一経版が遺存する初雕高麗版の欠筆例を、次に掲げる。

- 『出三蔵記集』卷第二―欠筆例…敬(1/1)、竟(1/1)、鏡(3/3)、弘(12/12)。「競股慙」は出現しない。同卷第三―欠筆例…竟(3/3)、鏡(1/1)、弘(4/4)。「競」全二例を欠筆しない。「敬股慙」は出現しない。同卷第四―欠筆例…敬(3/3)、鏡(1/1)、弘(2/3)。「竟競股慙」は出現しない。同卷第五―欠筆例…竟(5/5)、鏡(1/1)、鏡(3/3)、弘(5/5)。「敬股慙」は出現しない。同卷第六―欠筆例…鏡(8/8)、競(1/1)、弘(5/5)。「竟敬股慙」は出現しない。同卷第七―欠筆例…敬(2/2)、竟(1/1)、競(1/1)、弘(5/5)。「競股慙」は出現しない。同卷第八―欠筆例…竟(7/7)、鏡(8/8)、鏡(2/3)、弘(15/16)、股(2/2)、慙(0/3)。「敬股」は出現しない。同卷第九―欠筆例…敬(4/4)、竟(2/2)、鏡(4/4)、競(2/2)。「慙」全二例は欠筆しない。「股弘」は出現しない。同卷第十―欠筆例…敬(2/2)、竟(2/2)、鏡(7/7)、競(3/4)、弘(13/13)。「慙股」は出現しない。同卷第十一―欠筆例…敬(1/5)、竟(2/7)、弘(13/13)。「競」全五例に欠筆は存しない。「鏡慙股」は出現しない。同卷第十二―欠筆例…敬(5/21)、竟(2/17)、鏡(2/4)、弘(19/19)、股(1/1)。「競」全三例、「慙」全二例に欠筆は存しない。
- 『開元釈教録』卷第十二―欠筆例…敬(9/9)、弘(4/4)、竟(2/2)。「鏡競股慙」は出現しない。
- 『集諸經禮懺儀』卷上―欠筆例…敬(60/60)、竟(3/3)、鏡(5/5)。「競」全二例は欠筆しない。「弘股慙」は出現しない。
- 『法句經』卷下―欠筆例…敬(2/2)、弘(1/2)、竟(1/1)。「競」全二例を欠筆しない。「鏡股慙」は出現しない。
- 『比丘尼傳』卷第四―欠筆例…敬(12/12)、弘(4/4)、竟(7/7)、鏡(1/2)、股(1/1)。「鏡慙」は出現しない。
- 『大乘金剛髻珠菩薩經』―欠筆例…敬(5/13)、股(1/1)。「竟鏡競弘慙」は出現しない。
- 『統集古今仏道論衡』―欠筆例…敬(5/5)、弘(5/5)、竟(3/3)、鏡(2/2)。「競股慙」は出現しない。
- 『大方広仏華嚴經統入法界品』―欠筆例(ナシ)。「敬」全十例、「竟」全一例を欠筆しない。「弘鏡競股慙」は出現しない。

右のごとくである。日本古写本が底本とした開寶藏では、この初雕高麗版と

同等またはそれ以上の欠筆が存したものと考えられる。

ところが、右に挙げた、石山寺・七寺・中尊寺・興聖寺・妙蓮寺・金剛寺・西方寺・龍谷大学の日本古写本すべてにおいて、欠筆例は皆無であった。

以上、大津・名古屋・平泉・京都・大阪・奈良各地の一切経古写本に欠筆例が存しないことから、日本古写本は開寶藏の欠筆を受容していない、と考えられる。開寶藏刊記を写した日本古写本は、いづれも一切経内のものである。これらの写経は、隋唐の流れを汲む経本の欠を補うため宋版を写写したものであり、底本に見られた宋代の文化事象「欠筆」までは反映しなかった、ということであろう。

五、高麗版・金版・日本古写本の欠筆比較

右の、開寶藏刊記を写写した日本古写本には、高麗版・金版で欠筆を調査した『雜阿含經』の遺品を見出せない。しかし、『出三蔵記集』の写本が目立つ。

そこで、『出三蔵記集』諸本の比較結果を示すことで、高麗・金・日本における欠筆の受容実態を確認したい。『出三蔵記集』は、左の残存状況である。ただし、開寶藏刊記を写す日本古写本は、本文を閲覧できた既掲のものに限る。

開寶藏―現存しない。初雕高麗版・再雕高麗版―全15巻完存。
金版―卷第2、4、15が現存。日本古写本―卷第2、12。

この残存巻のうち、開寶藏以外のすべての本が比較できる巻を比較した。紙幅の都合から、欠筆例が比較的多い『出三蔵記集』卷第九・十一・十二の三巻における対照結果のみを、表にまとめて示す。

卷第九(欠筆字のみ記す。欠筆例が無い場合は―で示す。以下、同じ)。

紙数	初雕高麗版	再雕高麗版	金版	日本
第2紙	23鏡(23行目)	―	―	―
4	16弘	16弘	―	―
5	15鏡・2323 弘・5敬	15鏡・2323 弘・5敬	1・2323 弘・―	―
6	4713弘	4713弘	4713弘	―
11	18敬	18敬	―	―
14	722弘	722弘	722弘	―

13	11	9	8	6	7	5	第4紙	紙数	初雕高麗版	再雕高麗版	金版	日本
21 22 弘	9 弘	12 弘	16 弘	4 7 13 弘	10 12 22 弘	14 21 弘	15 弘					
21 22 弘	9 弘	12 弘	16 弘	4 7 13 弘	10 12 22 弘	14 21 弘	15 弘					
21 22 弘	9 弘	12 弘	16 弘	4 7 13 弘	10 12 22 弘	14 21 弘	15 弘					

卷第十一

「初雕高麗版欠筆例数」敬(4/4)、竟(2/2)、鏡(4/4)、競(2/2)、
 慳(0/1)。殷弘は出現しない。」

37	35	33	32	31	30	28	25	22	21	15
13 弘	15 弘・ 敬	2 競・ 10 弘・ 23 竟	23 弘	9 弘	11 竟	5 11 弘	3 競・ 11 弘	18 弘	1 弘	4 敬
13 弘	15 弘・ 敬	2 競・ 10 弘・ 1	23 弘	9 弘	11 竟	5 11 弘	1 ・ 11 弘	18 弘	1 弘	4 敬
13 弘	15 弘・ 1	1 ・ 10 弘・ 1	23 弘	9 弘	1	1	1 ・ 11 弘	18 弘	1 弘	1

25	19	18	15	14	13	12	11	10	8	7	3	2	第1紙	紙数	初雕高麗版	再雕高麗版	金版	日本
14 敬・ 16 弘	3 弘	12 弘	20 弘	5 弘	1 弘	23 弘	9 弘・ 13 鏡	7 敬・ 10 竟・ 13 弘	20 鏡・ 21 敬・ 21 殷	7 弘	22 敬	19 弘・ 22 敬	5 竟・ 11 弘					
14 敬・ 16 弘	3 弘	12 弘	20 弘	5 弘	1 弘	23 弘	9 弘・ 13 鏡	7 敬・ 10 竟・ 13 弘	20 鏡・ 21 敬・ 21 殷	7 弘	22 敬	19 弘・ 22 敬	5 竟・ 11 弘					
1 ・ 16 弘	3 弘	12 弘	20 弘	5 弘	1 弘	23 弘	9 弘・ 1	1 ・ 1 ・ 13 弘	1 ・ 21 敬・ 21 殷	7 弘	1	19 弘・ 1	1 ・ 11 弘					

卷第十二

「初雕高麗版欠筆例数」敬(1/5)、竟(2/7)、競(0/5)、弘(13/13)、
 鏡殷殷は出現しない。」

26	25	19	16	14
10 敬	2 竟	16 竟	20 弘	18 弘
10 敬			20 弘	18 弘
			20 弘	18 弘

44	21弘	21弘	21弘	1
42	13弘 19弘 20弘	13弘 19弘 20弘	13弘 19弘 20弘	1
41	19弘	19弘	19弘	1
31	4弘	4弘	1	1

〔初麗高麗版欠筆例数〕敬(5/21)、竟(2/17)、鏡(2/4)、競(0/3)、弘(19/19)、殷(1/1)、愍(0/2)。

以上、欠筆字は、「敬鏡競弘殷」である。掲げざることを略した他巻においても、等しい。これは、開寶蔵およびそれを模した高麗版・金版にこれまで見られた欠筆字と同一である。

また、高麗初麗版の欠筆例が最も多く、高麗再麗版がこれに次ぐことも確認される。金版の欠筆例は、「弘」が大部分であるものの、この『出三蔵記集』においては比較的多い。

一方、開寶蔵の刊記を写した日本古写本には、欠筆例は皆無である。

六、結論

本稿の目的を、次の二点とした。

一、北宋開寶蔵における欠筆の実態を明らかにする。

二、開寶蔵に表われた中国の文化事象「欠筆」が、高麗・金および日本に伝承されたものか否かを、高麗版・金版および日本古写本に依って調査する。結論は、以下のとおりである。

一、現存開寶蔵全十二巻の複製本において、欠筆を確認できるのは、「敬竟弘愍」の四字である。この四字は、北宋初代皇帝趙匡胤の祖父および父の諱嫌名にあたる。ただし、「敬弘愍竟」を常に欠筆にするのではなく、欠筆とする割合は巻によって異なっている。

二、この開寶蔵の欠筆は、高麗初麗版には高率で引き継がれた。しかし、高麗再麗版・金版では欠筆率が下がり、日本古写本には欠筆例を指摘できない。

【注】

- (1) 尾崎康『正史宋元版の研究』(一九八九年、汲古書院)など氏一連の研究は、近年の代表的なものである。
- (2) 竺沙雅章『宋元佛教文化史研究』(二〇〇〇年、汲古書院)三一七頁に依る。

- 高麗版・金版は、會谷佳光「仏教典籍(漢文資料)の調べ方」(二〇一二年二月十六日(木)平成33年度アジア情報研修資料) http://rnavind.go.jp/asia/tmp/H23.asiakensyu_4.a1ran.pdfに依る。
- (3) 大屋徳城「高麗統統蔵雕造放補遺」(一九三九年四月、『大屋徳城著作選集第九巻』(一九八八年、国書刊行会)所収)。
- (4) 前注大屋論文、尾崎正治「思溪版蔵経に見える欠筆と刻工」(『福井文雅博士古稀記念論集 アジア文化の思想と儀礼』(二〇〇五年、春秋社)所収)で報告されている。
- (5) 藤枝見編著『高昌残影―出口常順蔵トルファン出土仏典断片図録』(一九七八年、法蔵館)後、『トルファン出土仏典の研究』(二〇〇五年、法蔵館)にも収載) 図版五〇三。
- (6) 全使用例2例を欠筆にする。注②竺沙著書、二六一頁。
- (7) 李際寧「關於『開寶蔵』的避諱問題」(『國際學術會議發表論文集 初麗大藏經斗東亞細亞の大藏經』(二〇一二年、韓國學中央研究院))。
- (8) これを、竺沙雅章『漢文大藏經の歴史―特に宋元版大藏經について―』(『斯道文庫論集』第37輯、二〇〇三年二月)は、開寶蔵の本格的な麗版の前段階であったためと解釈されている。
- (9) 開寶蔵の断片に欠筆例が指摘されている「殷」および太祖の諱「匡胤」は、残巻全十二巻本文中に出現しない。そのため、開寶蔵複製本全十二巻における欠筆についての記述では、「殷匡胤」について触れない。なお、開寶蔵複製本全十二巻において、「玄境」は使用例が存するものの、欠筆例は皆無である。
- (10) ただし、最終面を補刻しているようにも見られる。
- (11) 「竟」の残り4例中に、補刻が有るようにも見られる。
- (12) 「竟」二例とも、補刻により欠筆を補っているように見られる。
- (13) 『宋代避諱字表略』(『静嘉堂文庫編纂』『静嘉堂文庫宋元版版圖録 解題篇』(一九九二年、汲古書院)所収)、王建編著『史諱辭典』(二〇一一年、上海古籍出版社)によって作成した。
- (14) 初代皇帝匡胤の諱「匡胤」は、現存開寶蔵経本文中に出現しない。しかし、開寶蔵の欠筆を反映する高麗初麗版においても、「匡胤」は欠筆にされていない。
- (15) 版数・紙数を、開寶蔵・高麗再麗版および金版は「張」、高麗初麗版は「丈」とする。本稿では、引用を除き、「紙」で統一する。
- (16) 小川貫一「坂東本『教行信証』の成立過程」(『教行信証撰述の研究』(一九五四年、百華苑)所収)。
- (17) ついで、「高麗大藏経」 <http://ksutrarekr/ritk/index.do>に画像が公開

されていることをもって、高麗初雕版が現存すると判断している。

(18) ただし、第九丈の画像は公開されていない。

(19) 上杉智英「七寺蔵一切経本『集諸経礼懺儀』巻下 解題」(国際佛教学大学院大学学術フロンティア実行委員会「日本古写経善本叢刊」第四輯(二〇一〇年)所収)は、『集諸経礼懺儀』巻下の高麗初雕版・再雕版・金蔵本を比較し、初雕高麗版は、「開寶蔵本における欠筆の状況をより留めていることが推察される」とする。さらに、初雕本では欠筆せず、再雕本・金蔵本で欠筆する例が存することも、同時に指摘している。

(20) ④「大方等大集経」巻第四十三は、影印が公開されていないものの、中国国家図書館に金蔵が保管されているという(大真大学校(韓国)の柳富銘教授にお教えいただいた)。

(21) 金蔵『雜阿含経』巻第十一〜三十の残巻十七巻における欠筆例は、高麗再雕版の欠筆例と完全に一致している。これは、偶然の一致とは考えられない。その理由については、改めて考えたい。

(22) 七寺一切経保存会「七寺一切経目録 尾張史料」(一九六八年)、石山寺文化財総合調査団『石山寺の研究 一切経篇』(一九七八年、法蔵館)、元興寺文化財研究所編『大和郡山口市西方寺所蔵一切経調査報告書』(一九八四年)、京都府教育委員会編『興聖寺一切経調査報告書』(一九九八年)、興膳宏編『中尊寺経を中心とした平安時代の装飾経に関する総合的研究』(二〇〇五年)、科学研究費補助金(基盤研究A2) 研究成果報告書、落合俊典編『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』(二〇〇七年、科学研究費補助金(基盤研究A) 研究成果報告書)、参照。石山寺一切経本は原本に、七寺蔵本・興聖寺蔵・金剛寺蔵本・西方寺蔵本の調査は国際佛教学大学院大学所蔵の写真に、中尊寺一切経は京都国立博物館蔵のマイクロフィルムに依った。

(23) 直接の底本であったか否かは、奥書から知ることはできない。しかし、中には、『出三蔵記集』の七寺蔵本巻第十一・巻第十二、興聖寺蔵本巻第三・巻第九・巻第十の如く、開寶蔵の行取りのまま、一行十四字を基本とするものも存する。目録が中心の『出三蔵記集』では、本文部分をあえて十七字に変更しなかったものであろう。

なお、注(19)上杉論文に、七寺本『集諸経礼懺儀』巻下(開寶蔵刊記は巻上末に有り)の書式・欠筆について、「一行十七字前後、一紙二六行と、開寶蔵本の版式を留めて居らず、欠筆も認められない。」との指摘がある。

(24) 楊婷婷「興聖寺蔵『出三蔵記集』の系統について」(『東アジア仏教写本本研究拠点の形成』公開研究会発表、二〇一二年五月十九日。ワークショップ「刊本大蔵経と日本古写経」発表、二〇一三年二月二十一日)は、興聖寺蔵『出

三蔵記集』を検討の結果、千字文だけが写された写本、および、刊記も千字文も写されていない写本にも、開寶蔵からの転写本が存する、とした。興聖寺蔵『出三蔵記集』以外の奈良写経転写本とされてきた古写経の中にも、開寶蔵または他の宋版からの転写本が存することである。

(25) この点、親鸞の欠筆は特異である。親鸞の欠筆については、別稿で述べる。牧野和夫「十二世紀後末期の日本船載大蔵経から尙将来大蔵経をのぞむ」(吉原寛人・王勇編著『海を渡る天台文化』二〇〇八年十二月)、同「尙将来蜀版大蔵経の刊記・印造記について」(『実践女子大学文学部紀要』第51集、二〇〇九年三月)は、『出三蔵記集』の隋唐系写本が十二世紀後半には伝わっていないなかった可能性を説いている。

(27) ただし、「懺」は、『出三蔵記集』における使用例が少ないためか、欠筆例を指摘できない。

【付記】

文献調査に当たり、石山寺御当局ならびに石山寺文化財総合調査団長奥田勲先生はじめ団員の皆様、国際佛教学大学院大学の落合俊典先生・上杉智英先生、京都国立博物館の赤尾栄慶先生に、ご高配を賜りました。心より御礼申しあげます。

欠筆 (the lack Writing) in 開寶藏 (the Northern Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon),
and the Influence

Isamu Sasaki

Abstract: The purpose of this article is two of the next. 1. I make the real situation of 欠筆 in 開寶藏 clear. 2. I investigate the influence of the 欠筆. The result of the investigation are as follows. 1. The lack Writing kanji (漢字) of 開寶藏 is four characters of “敬竟弘愍”. These four kanjis are connected with the name of grandfather and father of 趙匡胤 which is the first emperor of north Soong. But four kanjis are not considered to be the 欠筆 all the time. The ratio of 欠筆 are different every book. 2. 高麗初雕版 inherits most of the 欠筆 of 開寶藏. However, the 欠筆 of 開寶藏 was not handed down to 高麗再雕版 and 金版 very much. And the old Japanese copied books do not copy the 欠筆 of 開寶藏 at all.

Key words: the Northern Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon, the lack Writing, All the Buddhist sutras for Korai, All the Buddhist sutras for Jin, Japanese copied sutra of old time

キーワード：開寶藏, 欠筆, 高麗版一切經, 金版一切經, 日本古写經